

## 緑地開発計画から生まれた環境教育活動の展開過程

## —神奈川県藤沢市の川名里山レンジャー隊の活動—

## Environmental education activities of the Kawana Satoyama Ranger organization accompanying the green space development plan in Fujisawa, Kanagawa Prefecture, Japan

早川尚吾\*1・杉浦克明\*1

Shogo HAYAKAWA \*1 and Katsuaki SUGIURA \*1

\*1 日本大学生物資源科学部

College of Bioresource Sciences, Nihon University, 1866 Kameino, Fujisawa, Kanagawa 252-0880, Japan

**要旨：**神奈川県藤沢市にある川名清水谷戸を活動場所とし、自然を後世に伝えることを目的に活動しているボランティア団体に川名里山レンジャー隊がある。本研究の目的は、川名里山レンジャー隊の環境教育活動に着目し、17年間行われてきた活動記録の分析から緑地開発計画から生まれた環境教育活動の展開過程を明らかにすることである。その結果、地域の小学校や公民館等と連携した環境教育プログラムが展開されている。その理由として、このレンジャー隊の活動への理解との関心が得られているからこそ、活動範囲が拡大していると考えられる。近年、この環境教育プログラムは五感の活用に重点を置いた内容に変化しており、資料と筆記用具を利用したプログラム内容は減少してきている。その理由としては、授業で実施している環境教育活動の減少により、自然との触れ合う時間の確保に重点が置かれたためであると考えられる。

**キーワード：**藤沢市・川名清水谷戸・環境教育・谷戸・川名里山レンジャー隊

**Abstract:** The Kawana Satoyama Rangers are a volunteer organization in Fujisawa, Kanagawa. Its activities are focused on environmental education to preserve nature in Kawana-shimizu valley (Yato) for future generations. The purpose of this study is to explain the deployment of environmental education activities born out of the master plan by analyzing the 17 years of activity of the Kawana Satoyama Rangers. The results show that the organization has established and expanded environmental education programs in cooperation with local elementary schools and community centers with understanding and interests of the Ranger activities. In recent years, this environmental education program is changed to contents with emphasis on the use of the five senses, and the program contents using writing utensils are decreasing. The emphasis is placed on securing time to interact with nature due to the decrease in environmental education activities at school classes.

**Keywords:** Fujisawa, Kawana-shimizu valley (Yato), environmental education, valley (Yato), Kawana Satoyama Renger

## I はじめに

神奈川県藤沢市は、県の中央南部に位置し、工業や商業都市として発展した人口約42万人の都市であり、交通の便の良さから首都圏近郊の住宅地でもある(3)。相模湾に面した江の島や湘南海岸といった観光地でも有名である。その藤沢市には、三大谷戸と呼ばれる川名清水谷戸、石川丸山谷戸、遠藤笹窪谷戸の3つの谷戸があり、藤沢市ビオトープネットワーク基本計画において、保全型核エリアとして位置づけられている(2)。

しかし、三大谷戸の中でも最も南に位置する川名清水谷戸には、1957年より都市計画道路横浜藤沢線(以下、横浜藤沢線)の道路計画があり、住宅地や自然環境への

影響についての議論が現在でも行われている(1)。

その様な中、横浜藤沢線の道路計画を契機に、川名清水谷戸を守るために、地元の有志によって「川名清水谷戸を愛する会」が1992年に発足した(1)。その後、日本大学生物資源科学部の学生が加わったことで、大学生が主体の活動が主となり、2001年にはボランティア団体として「川名里山レンジャー隊」(以下、レンジャー隊)に名称を変更した(1)。レンジャー隊の活動目的は、川名の自然を後世に伝えることであり、環境教育活動や藤沢みどり基金への寄付等を行っている(5)。

このように、自然環境保全を地域のテーマとして生まれた組織の環境教育を含む活動の展開過程を明らかにす

ることは、小学校、市民、大学等が連携をとって実施している環境教育活動の改善と発展のための手がかりになる可能性がある。そこで、本研究の目的は、藤沢市のボランティア団体川名里山レンジャー隊の環境教育活動に着目し、川名里山レンジャー隊の実施記録の分析から、この活動の展開過程を明らかにすることである。

## II 調査対象と方法

調査対象のレンジャー隊の活動拠点である川名清水谷戸（緯度 35° 19' 46" 経度 139° 29' 54"）は、藤沢駅の南東約 1.2km に位置し、面積は 17ha である

(2) (図 - 1)。丘陵地が長い年月をかけて浸食されて出来た谷状の地形で、奥と入口との高低差は約 3m で (1)、中央には 1900 m<sup>2</sup> のため池がある。そこは 3 つの枝谷戸が分岐しており、前谷戸、中谷戸、奥谷戸と呼んでいる (図 - 1)。隣接地である新林公園の緑地を含めると面積は約 32ha あり、この地域を川名緑地と呼んでいる (1)。

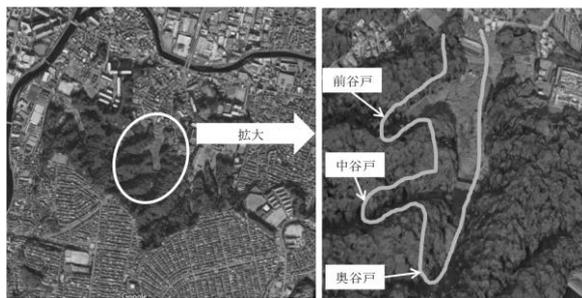


図 - 1. 川名緑地 (左) と川名清水谷戸 (右)

Fig. 1 Kawana green space (left) and Kawana-Shimizu valley (Yato) (right) 出典 : Google

調査方法はレンジャー隊結成後から事務局が管理している実施記録や関連資料を用いて、歴史、プログラム内容の展開過程を分析した。なお、レンジャー隊前身の「川名清水谷戸を愛する会」(1999 年から 2001 年)として行われた活動の記録が残されていなかったため、除外した。

## III 結果

1. 川名里山レンジャー隊結成までの背景 1957 年より横浜藤沢線は、周辺地域における交通渋滞の緩和を図るために幹線道路として都市計画決定され、早期の整備が求められている (4)。1980 年代には、川名清水谷戸の手前の約 3.3 km 区間で工事が開始された (1)。当初の計画では川名清水谷戸の中央を横断する計画がなされていたため、工事の見直しを求めため 1992 年に地元の有志によって「川名清水谷戸を愛する会」が発足された (1)。

1996 年には日本大学生物資源科学部の自然保護研究会や 2000 年には農研 (植物資源科学科学術研究部) といったサークルに所属している学生と「川名清水谷戸を愛する会」との関わりが生まれ、谷戸の手入れや自然観察に参加するようになった (1)。

大学生が主体となって活動が行われるようになったことを機に 2001 年に「川名里山レンジャー隊」に名称を変更した (1)。なお、藤沢横浜線の道路計画は計画当初 (1957 年) は地上式だったが、現在は地下式への変更が計画されている (1)。

## 2. レンジャー隊の組織体制と環境教育活動の概要

1999 年に現在の川名里山レンジャー隊の事務局に、S 小学校 3 年生の「総合的な学習の時間」(以下、総合) の授業として川名清水谷戸を使った自然体験の依頼があった。これをきっかけにレンジャー隊の環境教育活動が始まった。レンジャー隊の環境教育活動を通称「谷戸探検」と呼んでいる。谷戸探検は、主に児童を対象とし、川名清水谷戸を中心とした自然を身体で感じてもらう活動である。基本的な内容は、午前中 (9 : 00 ~ 12 : 10) に川名清水谷戸を中心とした散策である。それに加え、一部の団体には、午後 (13 : 35 ~ 15 : 10) に教室などの屋内で工作を行ったりもする。その基本内容を実施するに当たり、参加者が自然に視点を向けられるようにするために工夫を凝らした補助的なプログラム (以下、補助プログラム) を行っている。

レンジャー隊は特に登録制という形をとっておらず、川名清水谷戸が好きで活動に賛同する人であれば隊員になれる。日本大学の現役の学生を中心とし、卒業生や地域の方々で構成されている。レンジャー隊ではインストラクターの招集や準備等を主に行う谷戸探検担当の役員を決めている。環境教育活動のインストラクターとして参加する人数は毎年変動するが、活動に参加するのは、現役学生が約 50 人、卒業生が 15 人程度である。年会費も特に設けていない。ただし、レンジャー隊が月 1 回谷戸で行う農作業の際に提供する豚汁代 (300 円) を「川名清水谷戸を愛する会」発足時からの有志の 2 人に支払うことになっており、それが活動資金の一部になっている。

その有志 2 人は小学校、公民館、子ども会、県や市との連絡等の事務的な中心業務を行っており、レンジャー隊の活動場所の地権者でもある。

## 3. レンジャー隊と谷戸探検の活動の変遷

レンジャー隊と谷戸探検の活動を表 - 1 にまとめると、先にも述べたように、1999 年に S 小学校 3 年生を対象とした谷戸探検が始まり、総合の授業として年 4 回実

施していた。1999年には、S小学校だけでなく、小学4年生から6年生を対象とした地域の公民館事業の年間プログラムの一つとして谷戸探検が取り入れられた。

2006年には、谷戸の地権の問題により藤沢市みどり保全課から奥谷戸(図-1)の利用の自粛が求められた。そのため、川名清水谷戸ではレンジャー隊に関係する人が所有する土地のみで活動を行うようになり、公共施設である新林公園を含めた活動に転換した。

2007年にはS小学校の谷戸探検が年3回に減少している。2011年には、総合の授業削減によりS小学校での谷戸探検が年2回に減ったため、一般市民を対象とした公募型谷戸探検を開始するようになる。さらに、2013年には子ども会事業の一つとして谷戸探検が開始された。つまり、現在はS小学校、公民館、一般市民、子ども会の4つを対象にした谷戸探検が行われ、活動の対象が拡大している。

表-1. レンジャー隊と谷戸探検の変遷

Table 1 History of Kawana-Satoyama Rangers and environmental education activities called "Yato exploration"

1992年	川名清水谷戸を愛する会発足
1996年	日本大学生物資源科学部のサークルとの連携活動開始
1999年	S小学校谷戸探検開始(年4回) 公民館事業の一つとして谷戸探検開始
2001年	川名里山レンジャー隊に名称改編
2006年	藤沢市みどり保全課の指導により奥谷戸利用を自粛
2007年	S小学校谷戸探検(年3回へ減少)
2011年	市民対象の公募型谷戸探検開始
2013年	S小学校谷戸探検(年2回へ減少) 子ども会事業の一つとして谷戸探検開始

**4. S小学校を対象にした谷戸探検** S小学校谷戸探検は、小学校の授業1時間目から4時間目までを使い、インストラクター3人に児童が10名程度のグループに分けて川名清水谷戸を中心とした散策を行っている。小学校またはレンジャー隊の希望で5、6時間目まで使う場合は、小学校内で午前のみで行ったり工作を行ったりする時間にしている。小学校を対象とした谷戸探検は2001年から2016年3月現在までに計46回行われている(表-2)。その内、36回は午前中のみの活動で、午後まで活動したのは10回であった。

S小学校での谷戸探検の補助プログラムの内容を、年間実施回数にあわせて大きく3つに区切り表-3にまとめた。2001年度から2006年度までの補助プログラム内容を見ると、多く実施された内容は自然を題材にした「ビンゴゲーム」やクラスで決めた樹木を年間の四季を通じて観察して特徴をスケッチするといった「クラスの木」が行われていた。このように、資料と筆記用具を用いた補助プログラムが展開されていた(表-2)。その他には、

探索ルートに設置されている指令書に従って、自然観察を促す「指令書」プログラムが行われていた。その他は、動植物の観察を主としたプログラムが実施されていた。

午後に実施されている内容としては、午前中の谷戸探検の内容の振り返りとして、新聞作りや地図作りが行われていた。また、午前から午後まで通して落葉やミミズを使ったプログラム内容も実施されていた。

2007年から2010年までの補助プログラム内容は(表-3)、ビンゴや指令書もあるが、身体の手を使って谷戸で感じたことを記入する「五感シート」の利用が目立つようになった。この時点でも、資料と筆記用具を用いたプログラムが多かった(表-2)。また、この期間から午後までの実施のプログラム内容は、アズマネザサ工作による鉄砲づくりが主となっていた。

2011年から2016年3月現在までの補助プログラム内容は(表-3)、これまでと同様に指令書やビンゴが多い。その一方で、この期間は資料と筆記用具を用いた探検が11回中3回と少なくなっている(表-2)。新たなプログラムとして、「春探し」、「匂い探し」などの五感を活用した内容が加わっていた。

表-2. S小学校での活動実績

Table 2 Activity history of S elementary school

	午前のみ	午後まで	計
2001年-2006年(年4回)	16(14)	7	23(14)
2007年-2010年(年3回)	11(8)	1	12(8)
2011年-2016年(年2回)	9(3)	2	11(3)
計	36(25)	10	46

注: 括弧内内の数字は資料を持って探検した回数を示す

表-3. S小学校での補助プログラムの内容

Table 3 Contents of the auxiliary program in the elementary

school	午前(探検)	午後(教室)	
2001年-2006年	ビンゴ	9 新聞作り	3
	クラスの木	8 地図作り	1
	指令書	5 午前中の探検のまとめ	1
	ミミズ観察	1	
	照葉樹観察	1	
	種同定(セミ)	1	
	ムクロジシャボン玉作り	1	
	カエルの卵観察	1	
	落葉観察	1	
		午前・午後通し	
	落葉採取と落葉アート		1
	ミミズ採集と観察		1
2007年-2010年	五感シート	4 アズマネザサ工作	1
	指令書	4	
	ビンゴ	2	
2011年-2016年	指令書	5 アズマネザサ工作	2
	ビンゴ	2 午前中の探検のまとめ	1
	春探し	1	
	匂い探し	1	
	五感カード	1	
	落葉採取	1	

**5. 公民館を対象にした谷戸探検** 1999年から実施している公民館主催の谷戸探検は、レンジャー隊は公民館事業の講師と呼ばれ、年1回5月に実施している。プログラムは、午前から午後(9:00~15:00)にかけて行われており、インストラクター3人に対して5人程度のグループにして散策を行っている。内容はターザン、ブランコ、がけ下り、アズマネザサ工作と決まっている。公民館事業であるため、参加人数等は把握していない。

**6. 一般市民を対象にした谷戸探検** 2011年から実施している一般市民を対象にした谷戸探検は、これまでに全7回実施されている。これまでの参加者数を見ると(表-4)、比較的中学年である3年生、4年生の参加者が多く見られる他、保護者が69名、1年生未満が25名と年齢層が幅広い。そのため、学年や年齢ごとに4つのコースに分けて、年齢に合わせた散策ルートや内容にして谷戸探検を提供していた。インストラクター3人に対して5人程度のグループをつくり散策を行っている。

**7. 子ども会を対象にした谷戸探検** 2013年から実施されている子ども会の事業を対象にした谷戸探検は、全3回実施されている。これまでの参加者数を見ると(表-4)、比較的学年の低い1年生から3年生が多い。基本的にインストラクター3人に対して5人程度のグループにして谷戸探検は行いが、これまでの他の活動とは異なり、「市民の家」を利用した屋内での工作体験の時間が多くなっている。

表-4. 子ども会と一般市民を対象とした活動の参加者数

Table 4 Number of participants in activities for

Kodomo-kai and the general public

	未就学	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学	保護者	計
一般市民	25	7	15	48	33	19	4	1	69	221
子ども会	0	30	35	22	21	16	14	0	0	138

#### IV. 考察

本研究の結果から、レンジャー隊の活動継続と活動範囲の拡大の理由として、レンジャー隊に所属している一部が日本大学のサークル団体の学生で構成されていることが一つの要因として考えられる。つまり、レンジャー隊の現役学生は約50人いるため、谷戸探検に必要なインストラクターの人数を確保しやすく、卒業してもその活動に参加する人もいる。それだけではなく、川名清水谷戸がこれまで継続してレンジャー隊の活動の拠点となっており、役員制を設けているために責任を持って次の世代への活動継承が行われている可能性がある。そのため、事務局の負担も軽減され、それぞれの役割分担が機能していることが推察される。それに加え、川名清水谷

戸利用の環境教育活動に関して、地域の小学校、公民館、子ども会、市民の理解や関心が得られているからこそ、活動範囲が拡大していると考えられる。これらの理解や関心が得られているのは、谷戸探検が環境に関わる市民運動に内在する学習や教育の機会を積極的に支援している活動(6)だからだろう。

補助プログラム内容については、小学校を対象とした谷戸探検の年間実施回数の減少により、四季を通してのプログラムが減少したといえる。この実施回数減少に伴い、子どもと自然との触れ合う時間を重視したため、資料や筆記用具を用いずに自然に触れることに集中させるプログラム内容に変化してきていると考えられる。

この様に、レンジャー隊はプログラム内容等を工夫しながら地域に密着した環境教育を支援する団体として展開しているといえる。現在は、事務局手続きの中心的な2人が各団体との調整を行っているため組織運営も機能しているのだろう。しかし、長期的な組織運営を考慮した場合、中心的な事務局の今後の体制を検討する必要がある。

#### 引用文献

- (1) 有賀正義・大谷房江・岸一弘・木平勇吉・野村順治・吉津邦子編著(2016)川名自然フォーラム10周年記念誌-川名清水谷戸の自然-。川名自然フォーラム
- (2) 藤沢市(2011)藤沢市緑の基本計画。  
<https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/midori/machizukuri/kankyo/shizenhogo/kihonkekaku.html> (2016年6月29日参照)
- (3) 藤沢市(2014)藤沢市環境基本計画(改訂版)。  
<https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/kankyou-s/machizukuri/kankyo/kekaku/kekakukaite.html> (2016年10月25日参照)
- (4) 藤沢市(2014)都市計画道路横浜藤沢線。  
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f4866/p374955.html> (2016年10月25日参照)
- (5) 川名里山レンジャー隊(2016)All about 川名里山レンジャー隊。  
<http://www.rangers.bz/ranger/allabout5.html> (2016年10月26日参照)
- (6) 大島順子(2009)地域づくりにおける環境教育-地域が主体となって築く持続可能なツーリズムを構築していく視点から-(現代環境教育入門. 降旗信一・高橋正弘編, 筑波書房). 57-79